

甘樫丘東麓遺跡の調査

—第161次

1 はじめに

甘樫丘は飛鳥川の西岸に位置する標高145mほどの丘陵である。甘樫丘は丘陵に多数の谷が入り込む複雑な地形で、本遺跡は東麓の谷の一つに形成されている。『日本書紀』には、皇極3年(644)に蘇我蝦夷・入鹿親子の邸宅が甘樫丘に営まれたことが記されている。

甘樫丘東麓遺跡では小規模なものも含めると、これまで7回発掘調査をおこなっている。第75-2次調査(『藤原概報 25』)では、谷の入口付近で7世紀中頃の焼土層を確認しており、この層からは多量の土器・焼土・焼けた壁土・炭化木材などが出土した。第146次(『紀要 2007』)・第157次(『紀要 2010』)の調査では、7世紀前半の石垣を長さ34mにわたり確認している。第151次調査(『紀要 2009』)では、谷の奥で7世紀の掘立柱の建物や塀などを多数検出し、第157次調査では北東の尾根裾で7世紀中頃の石敷を検出するなど、これまでの調査によって、谷全体において7世紀から大規模な造成をともなう土地利用がおこなわれていた状況が判明している。古代の遺構は大きく3時期の変遷があり、I期が7世紀前半から中頃まで、II期が7世紀後半、III期が7世紀末から8世紀初頭までにあたる。そのうち7世紀前半のI期は蘇我氏との関連が指摘されてきた(『紀要 2009』)。

今回の調査は、谷の入口部の遺構の様相の解明、第157次調査で検出した石敷の全容およびその背後の斜面の利用状況の解明、丘陵上部の遺構の有無の確認を主な目的とした。調査面積は846㎡、調査期間は2009年12月14日から2010年6月4日までである。

2 調査地周辺の地形および基本層序

調査地周辺の地形は、谷部を囲む尾根の裾部から傾斜が急な斜面が続き、中腹に傾斜が緩やかな部分がある。その上は再び傾斜が急になり、尾根の頂部には平坦面が存在する。今回の調査地は一連であるが、こうした地形を考慮して3つの調査区を設定した。第157次調査地の南東に隣接した谷部の調査区(A区)、第157次調査地の北東に隣接した尾根裾部の調査区(B区)、および尾根の

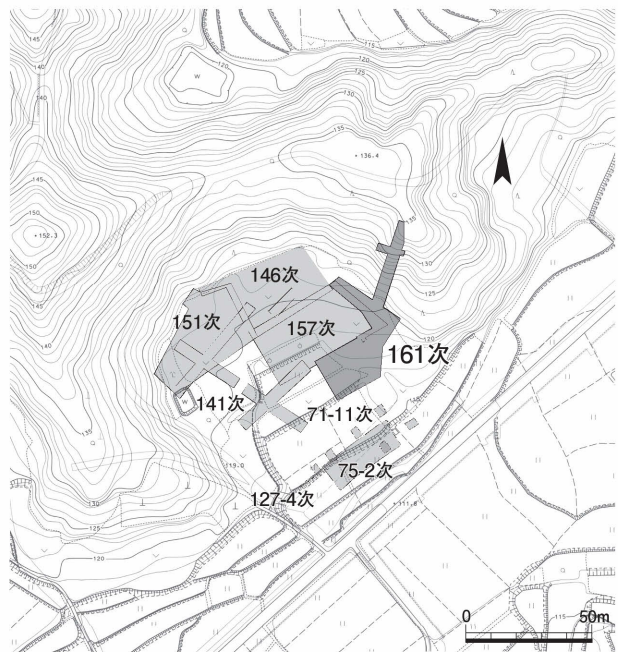


図142 第161次調査区位置図 1:3000

斜面に延ばした調査区(C区)である。各調査区は尾根から谷の広範囲にわたるため、調査区によりその地形と土層の様相は大きく異なるが、地山は風化花崗岩由来の黄褐色砂質土または緑灰色砂質土である。いずれの調査区でも、遺構検出面の形状は近現代の段畑および公園整備のための造成に大きく影響を受けている。中世以前の遺物包含層は調査区の一部で認められ、他の部分は地山上面が遺構検出面となる。以下、尾根上部から谷部に向けて記述するため、C区から逆順となる。

C区は、尾根の斜面に設定した長さ33m、幅5mのトレンチ。多くの部分で表土の直下が地山となるが、中腹の緩斜面一帯では遺物包含層が確認された。上から順に、赤褐色砂質土、灰褐色砂質土である。遺構検出面の標高は129m。中腹から裾部にかけては急激な斜面で、近現代の造成土の直下が地山となり、顕著な遺構は認められなかった。

B区は、尾根の裾に設定した長さ30m、西辺で幅5.5m、東辺で幅13mの調査区。西側の谷寄りでは遺物包含層が厚く堆積する。B区西端で遺構検出面は、尾根側は標高120.2mの地山上面、谷部は標高118.6mの古代整地土上面である。この遺構検出面の高低差は東へ行くほど小さくなり、B区東端ではなくなる。

A区は、谷部に設定した長辺約27m、幅18mの台形の調査区。B区との境界付近とA区中央の2ヵ所で、近現代の段畑や水路の造成により約1mの段差がある。二番目に低い平坦面では整地土層が確認されず、標高117.2

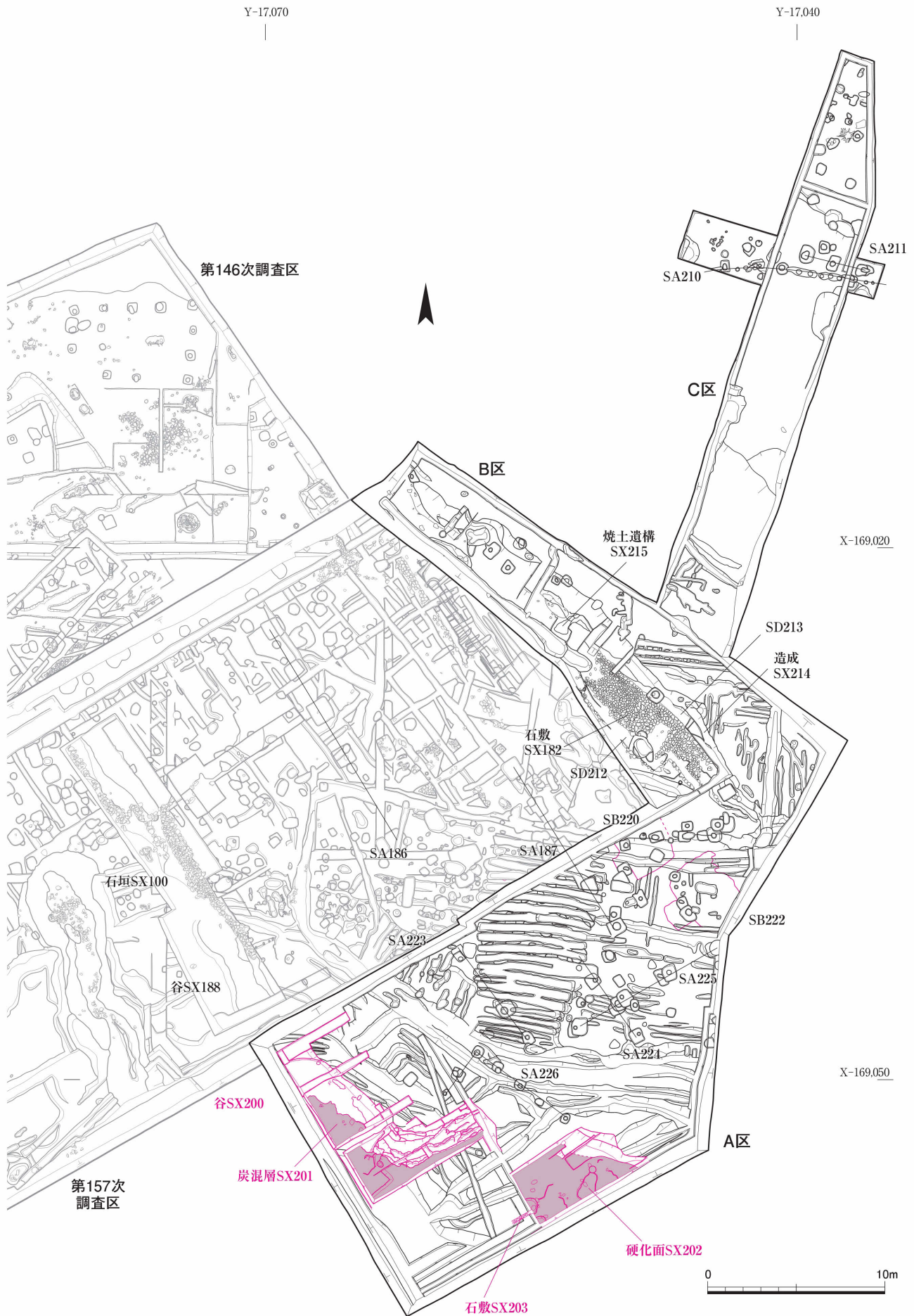


図143 第161次調査遺構図 1:300

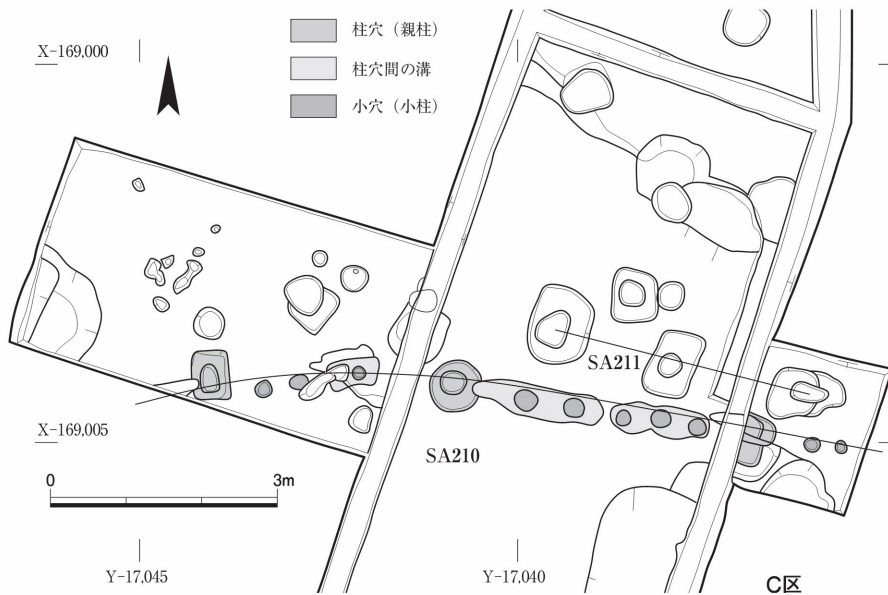


図144 柱列SA210・SA211遺構図 1:100

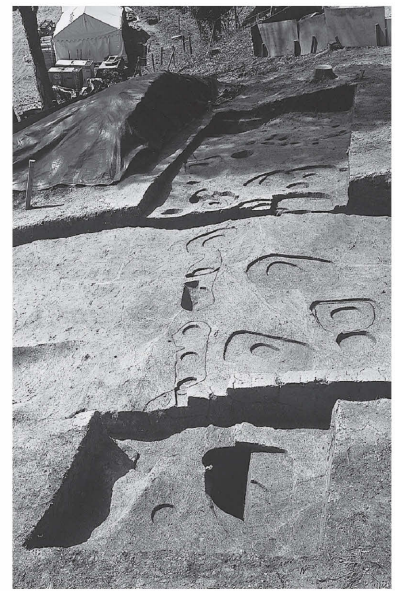


図145 柱列SA210・SA211 (東から)

mの地山上面が遺構検出面である。一番低いA区南西の平坦面では標高116m付近が遺構検出面である。一部では地山上面だが、大半は谷の埋土および整地土の上面が遺構検出面となる。谷中央寄りでは下層調査区を設定し標高113.4mまで掘り下げたが、地山の確認には至らなかった。

3 検出遺構

今回の調査では、7世紀の遺構の他、中世および近現代の造成・耕作痕跡が検出された。以下では、7世紀の遺構について、調査区ごとに述べる。

尾根中腹の遺構 (C区)

尾根中腹の標高130m付近に幅2～3mの緩斜面が存在し、地山を削り出して平坦面を造りだした様子も認められる。この緩斜面で尾根をめぐるように並ぶ掘立柱の柱列を2条検出した。直上の遺物包含層の出土土器から7世紀前半の遺構と考えられる。

柱列SA210 柱列2条のうち、南側のもの。柱穴3基と、その間に一連となる溝と小穴群からなる。柱間は東が4m、西が2.5mと一定しておらず、地形に沿って南に湾曲する様相を見せる。柱掘方は隅丸方形で、一辺が70cm、深さ50cm以上。溝は柱穴の間に断続的に掘られており、幅40cm、深さ20cm。小穴は径25cmの円形で、深さは30cm、溝の内部に50～60cmの間隔で並ぶ。重複関係より、柱(親柱)を立て、柱掘方を埋めたのち、溝を掘り、さらに小穴部分を掘りくぼめ、小穴に細い柱(子柱)を立て、溝ごと埋める、という工程が考えられる。

溝を掘り、その中に柱を立てるといった構築法は「大壁

造」と呼ばれ、明日香村の檜前遺跡群などに類例がみられる(明日香村教育委員会『明日香村の文化財13 檜前遺跡群』2009)。ただし、大壁造はすべての柱が溝内に立てられるが、SA210は親柱をもつという点で異なる。

柱列SA211 柱列2条のうち北側のもの。柱穴が3基、柱間は1.8m。柱掘方は隅丸方形で、長辺が70～100cm、深さ50cmを測る。

尾根裾部の遺構 (B区)

B区東側では石敷SX182と石組溝SD212の範囲を確認した。その尾根側で素掘溝SD213と造成SX214を検出し、尾根裾部の造成の過程があきらかになった。B区西側では焼土遺構SX215や柱穴を検出している。

造成SX214 尾根裾部で検出した、高さ0.5～1mの造成された段差。上面は後世の削平を受けている。地山をほぼ垂直に切り土した面(SX214a)と、その後、法面に盛土をして斜面を造成した面(SX214b)が確認された。この段差はSX182の北東からB区西端まで続く。

素掘溝SD213 SX214の北辺に沿って設けられた素掘溝。SD213aはSX214aにともなうもので、SX182およびSD213bの下層で確認した。SD213bはSX214bおよびSX182にともなうもので、SX182の尾根側に沿って検出した。幅は50～60cm、深さは約20cm、長さ11.5m分を確認した。SD213a・bいずれの埋土も砂と泥が細かく積み重なった水成堆積の層が含まれ、斜面からの水や泥を受ける機能を持っていたと考えられる。またSD213aは数度掘り直したようである。

石敷SX182・石組溝SD212 第157次調査で検出した石敷SX182が残存する範囲を確認した。最大幅2.5m、現存長

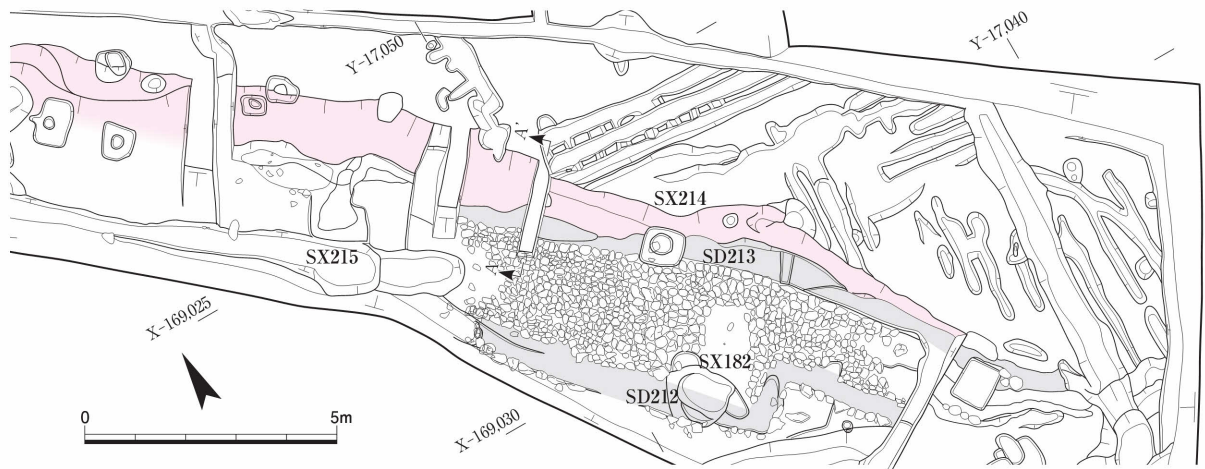


図146 造成SX214周辺遺構図 1 : 150

9.5mである。尾根側は面を揃えて石を並べ、地形を反映してゆるやかに湾曲する。谷側は鍵手状に曲がる石組溝SD212をめぐらせる。東側は今回の調査区内で新たに、3石と石組溝の抜取痕跡を確認した。これにより、現存する石敷の2m東までは石敷が広がっており、その範囲も含めると石敷の長さは少なくとも11.5mであったと考えられる。

SX182より新しいと考えられる整地土に7世紀後半の土器が含まれ、SX182より下の整地土からは飛鳥Ⅱの土器が出土した。すなわち、SX182は7世紀中頃に造られ、後半には廃絶していたと考えられる。

焼土遺構SX215 尾根裾部で検出した、焼土や炭の入った浅い土坑状の遺構。平面は不整形な滴形を呈し、東西80cm、南北120cm、深さは15cmが残存する。土坑の内面は被熱して暗褐色を呈し、その外側は赤橙色を呈す。壁の被熱は尾根側のほうが著しい。遺構埋土には炭粒・焼土塊が含まれ、尾根側の埋土のほうが炭や焼土塊の含有量が多くなる。遺構の上面および周囲に炭粒・焼土塊を含む土層が広がり、また遺構の基盤となる整地土にも炭粒を含むため、同様の遺構が繰り返し造られた可能性もある。埋土からは魚骨類も出土している。

谷部の遺構（A区）

A区の主に東側の平坦面において、地山上面で多数の柱穴を検出した。柱列としてまとまるものが5条であるが、まとめきれなかった柱穴も多く、建物になる可能性もある。A区の東端で竪穴建物を2棟と土坑を1基検出した。遺構の変遷は重複関係のみが判断材料であり、細かな時期は不明であるが、少なくとも3時期の変遷があったと考えられる。

柱列SA187 第157次調査区からのびる南北方向の柱列。

A A' H=119.50m

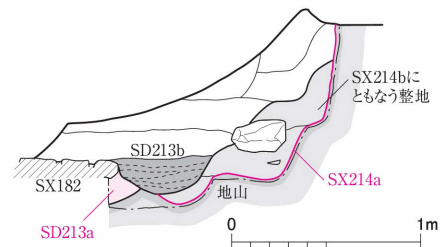


図147 造成SX214断面断面図 1 : 40

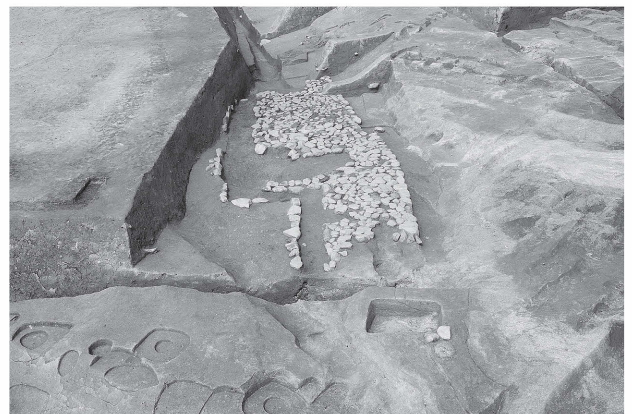


図148 造成SX214・石敷SX182（東から）



図149 焼土遺構SX215（南から）

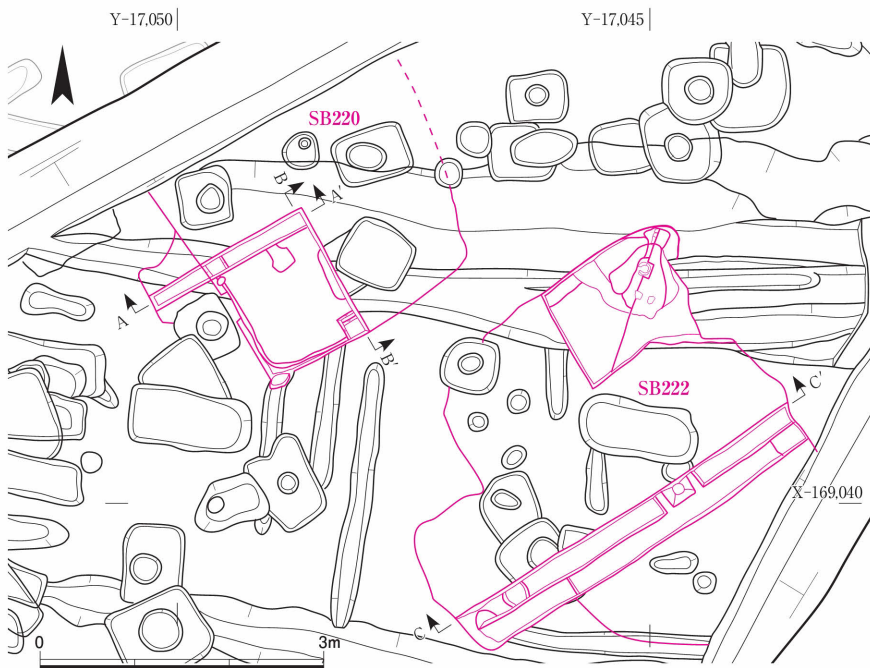


図150 竪穴建物SB220・SB222遺構図 1:80

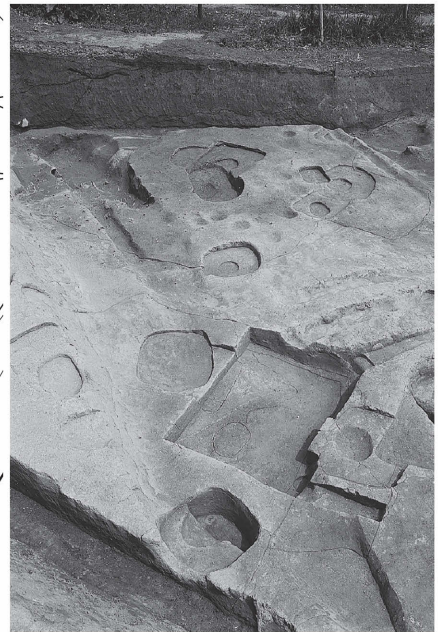


図151 竪穴建物SB220・SB222 (北西から)

第157次調査で3間分検出されており、今回の調査で新たに南側に柱穴1基を検出し、あわせて4間になることと、それ以南に柱穴は続かないことが確認された。柱掘方は一辺1.0mの隅丸方形で、深さ50cmが残る。柱間は2.7m、方位は北で30°西に振れる。

柱列SA225 SA187の南側で検出した、東西方向の柱列。3間分を確認した。方位は東で30°北に振れる。柱穴4基すべての掘方が2時期分重複する。いずれも東側の掘方のほうが新しく、30～40cm東へずれる。柱掘方は新旧いずれも一辺90～110cmの隅丸方形。深さ60cmが残る。2時期の掘方の底のレベルはほぼ同じか、東側の新しいもののほうがやや浅い。

柱列SA223 SA225の西にある、南北方向3間の柱列。柱掘方は一辺80cmの隅丸方形で、深さは50cm残る。柱間は2.1mで、方位は北で西に約40°振れる。

柱列SA224 SA225と交差する、南北方向3間の柱列。柱掘方は一辺80cmの隅丸方形で、深さ70cmを測る。柱間は2m、方位は北で西に35°振れる。南端の柱穴の重複関係から、SA225より古い。

柱列SA226 A区西側で検出された、鉤の手状に曲がる柱列。東西方向に4間、南北方向に2間確認された。柱掘方は最大で一辺70cmの隅丸方形。柱間は約1.5mで、方位は東で40°南に振れる。

竪穴建物SB220 A区の東北で検出した竪穴建物。長辺3m以上、短辺2.8mの長方形平面。西南辺に長さ0.6mの入口部をもつ。短辺の方位は東で30°北に振れる。竪

穴の壁の立ち上がりは東北辺で最大70cmの深さが残存するが、南半は近現代の造成のため大きく削平され、深さ15～20cmが残存する。床面の検出は、他の遺構が重複したため四半截しておこなった。その結果、竪穴平面では柱穴および壁溝、貼床1面を検出した。

壁溝は東南辺と西南辺で検出した。幅約25cm、深さ約10cmの溝と、壁際から板を抜き取ったと考えられる幅10cmの溝を確認した。貼床は灰色砂質土を厚さ3～5cmで地山の凹凸を埋めるように敷く。柱穴は竪穴の南隅から北に1.5mのところの位置し、長辺約30cmの方形。入口部は竪穴床面より20cm高く、階段状の施設であった可能性もある。

竪穴建物SB222 SB220の南東で検出した、カマドをもつ竪穴建物。長辺4m以上、短辺3mの隅丸長方形平面。西南辺の中央に1.5m×1mの入口部が張り出す。短辺の方位は東で30°北に振れる。深さは最大で30cm残存する。床面の調査は幅50cmのトレンチを短辺方向に設定しておこなった。その結果、竪穴平面で柱穴3基、壁溝、および貼床1面を検出した。

壁溝は建物の東北辺および西北辺で一部が検出された。幅20cm、深さ10cmである。入口部に壁溝は確認されなかった。貼床は、黄褐色粘質土を地山の凹凸を埋めるように敷く。竪穴中央付近の柱穴は、一辺30cmの方形で、深さ30cmである。入口部南隅の柱穴は、径25cmの円形で、深さは30cm。建物あるいは入口部の上部構造を支える隅柱の可能性もある。その北東に位置する柱穴は、径30cm



図152 SB222カマド半截状況 (南から)

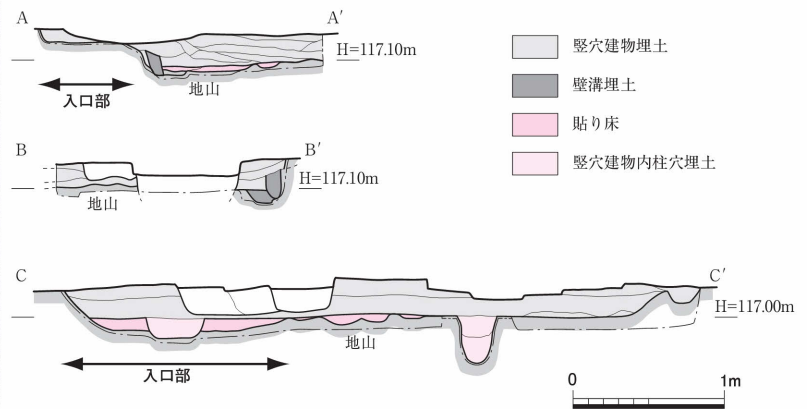


図153 SB220・SB222断面断面図 1:50

の楕円形で、深さは15cm。はしご穴の可能性はある。

カマドは竪穴北隅に設けられていた。カマドの軸は住居隅を指向する。焚口から煙道までが約70cm、両袖最大幅が約90cm。燃烧部で土器の口縁部を検出し、カマドの支脚と考えられる。煙道は長さ30cm分を確認した。緩い角度で傾斜して室外へのび、若干建物外に突出する。底面には土師器甕の破片を貼りつける。

SB222の年代は、貼床上面の出土土器から7世紀前半とみられる。SB220とは非常に近接しており、竪穴の立ち上がりや屋根の葺き下ろしを考慮すると、併存していた可能性は低い。建物の方位の振れや入口部が張り出す平面が類似すること、床面のレベルがほぼ同じであることなどから、建て替えなど近接した期間での構築物と考えられるが、先後関係は不明である。

谷部下層の遺構 (A区下層調査区)

A区西半分の谷部では、谷を埋めた整地土上でも慎重に検出をおこなったが遺構は確認できなかった。谷SX200の埋没状況と7世紀の遺構の状況を確認するた



図154 A区下層調査区 (北西から)

め、サブトレンチを掘削したところ、急激な落ち込みを確認した。平面的に谷の埋土を掘り下げて下層調査をおこなったところ、炭混層SX201や被熱による硬化面SX202などを検出した。

谷SX200 A区北西隅を谷頭とし、長さ15m、幅は最大で15m分を確認した谷状地形。谷底の確認ができなかったため、谷筋は不明である。谷の肩から1~1.5m掘り下げたところで平坦面が広がり、これが7世紀の遺構面と考えられる。北側の肩は大きく蛇行する。谷は自然地形を利用して、肩や法面の部分を人為的に造成し、中央部分は埋め土により平坦地を造成したとみられる。谷の肩部分の造成は2時期ある。7世紀前半は谷の肩を垂直に切り落としており、この時期に後述の炭混層SX201が平坦面に広がった。その後SX201の上に盛土をおこない、法面を階段状に造成したとみられる。

SX200の谷頭は第157次調査で検出され石垣SX100の延長上にあたる。また、SX200は谷SX188とは異なるものであるが、石垣SX100の裏込めの土と同時期と考えられる土層を切り込んでおり、最下層の埋土はSX188と一連のものと思われる。つまり、SX100は第157次調査で検出された部分より南には続かないことを確認した。SX200はSX100と同時期かあるいはわずかな時期差をもって造成されたものと判断することができる。

炭混層SX201 SX200の肩から1~1.5m掘り下げたところで平面的に広がる、炭粒・焼土塊を非常に多く含む灰褐色粘質土層。厚さ10~20cmで、下面に2~3cmの厚さで炭が一面に広がる。SX201の上面は緩やかな傾斜をしながら広がっており、谷頭・谷の肩が高く、谷中央が低い。最も高いところで標高114.6m、低いところで標高113.7mである。



図155 硬化面SX202 (西から)

硬化面SX202 下層調査区の南辺、SX200の北肩よりで検出した、焼きしまり硬化した面。平面は長径1.6m、短径1mほどの楕円形で、粘質土の上面が著しい被熱を受け、須恵質にも似た灰色を呈す。上面はほぼ平坦で、その周囲が低くなっていく、土まんじゅうのような断面形態である。中心部の被熱が著しく、周辺部になるにつれて被熱の度合いは弱くなり、灰色硬化面の周囲は黒褐色、赤褐色を呈する。

硬化面の下部については全体的な構造の把握が難しい。土層の状況からは、中心部に粘質土あるいは地山由来の砂質土を盛り上げて構築し、周堤状に粘質土を積み、その間の溝を灰色砂や灰黄褐色砂質土で埋めて、下部構造を構築するとみられる。それら下部構造の上におい黄橙色粘質土を敷く。この上面が著しい被熱を受けており、この面が機能面であったと考えられる。周囲は灰色砂を敷いて機能面を形成している。

関連する遺物が出土しておらず具体的な性格は不明だが、何らかの工房施設であり、高温の炎を扱う施設であったことが推定できる。

石敷SX203 調査区南辺のサブトレンチ底で、幅0.2m、長さ1m分を検出した。灰色砂層の上に据えられ、直上にSX201が堆積する。大きさ10cm程の礫を敷き詰めており、上面のレベルは揃うが、石の上面が特に平坦になるように配した様子はみられない。1段高い部分があり、2段積まれていた箇所もある可能性もある。SX202と同時期の遺構であり、関連する施設であった可能性が高い。

(番光)

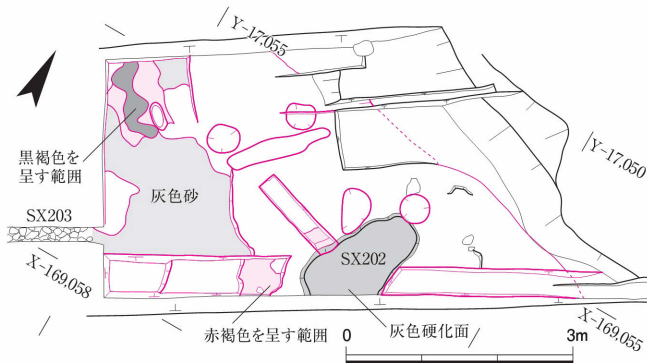


図156 硬化面SX202周辺遺構図 1:100

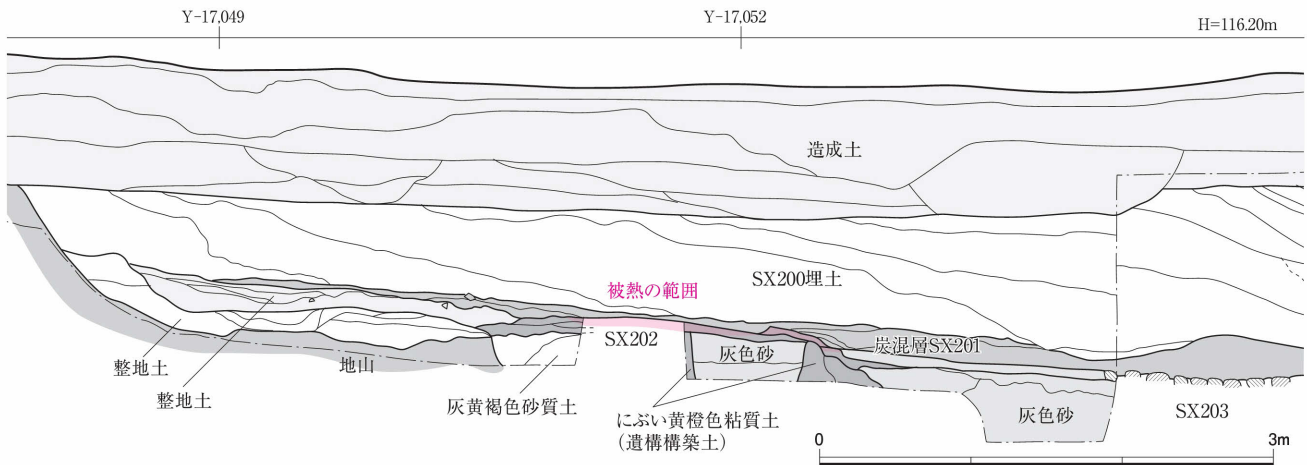


図157 A区東辺土層図 1:50

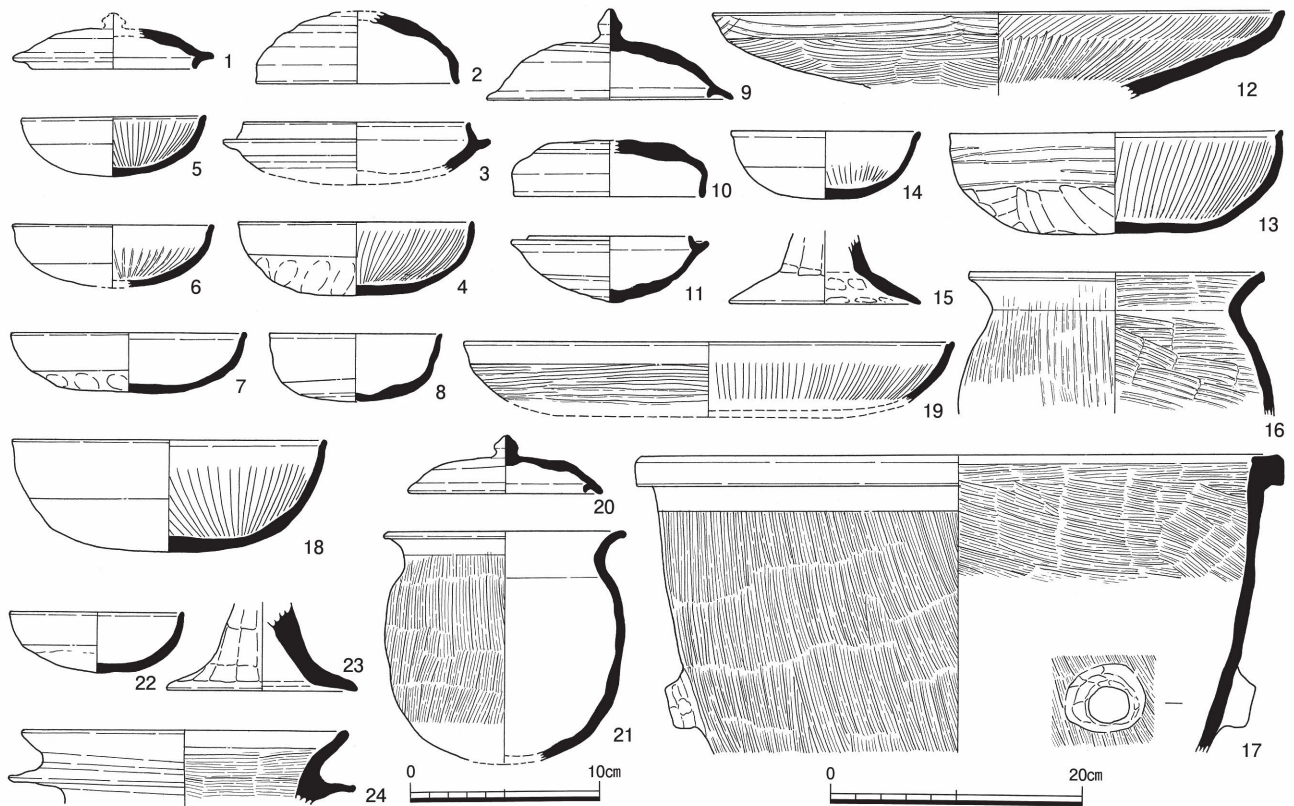


図158 第161次調査出土土器 1:4 (17のみ1:6)

4 出土遺物

土器 本調査区からは、整理箱にして24箱分の土器が出土した。A区の谷SX200埋土およびその上層の包含層出土のものが主体を占め、次いでB区の丘陵裾部の整地関連土出土土器が比較的まとまった資料となり、C区出土土器は僅少である。ここでは、B区とC区出土土器について報告する(図158)。

1～3はC区のSA210・211直上の包含層出土の須恵器。杯H(3)は古墳時代の所産だが、杯H蓋(2)、杯G蓋(1)ともに飛鳥Ⅰの新しい段階と考えられる。C区では他に時期が下る土器はほとんどなく、この地での活動の中心は7世紀前半にあったとみられる。

4～24はB区の出土で、土師器は風化が進んだものが多い。4～11は造成SX214の造成土または直上の整地土層から出土。土師器杯C(4～6)の径高指数は31から33で、須恵器杯H(10・11)や須恵器杯G(8)の法量からも、飛鳥Ⅱに位置づけられる。7は土師器杯G。須恵器の調整は、壺蓋(9)と杯Gにはロクロケズリを施すが、他はヘラ切り不調整。12～17は焼土遺構SX215

出土の土師器。杯CⅢ(14)の径高指数は35でやや古い様相を見せるものの、杯CⅠ(13)の径高指数が31であり、SX214出土土器とそれほど時期差はないとみられる。12は高杯Cで、下部に径約14cmの剥離痕がある。外面はケズリ後に丁寧に磨く。15は高杯H、16は甕。17は口縁部直下に太い隆帯をめぐらす、バケツ形になる土器。砂粒を多く含む粗い胎土で、外面は縦方向、内面上半は横方向のハケ目で調整する。外面のおそらく2カ所に低い円柱状の把手が付く。類例に乏しいが、甕とするのも一案であろう。18はSX215の基盤層である炭混層出土の土師器杯CⅠで、径高指数は35.3となり、飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層出土土器に近く、古い様相を示す。19は石敷SX182下の整地土から出土した飛鳥Ⅱの土師器皿A。20はSK216出土の須恵器杯G蓋で、頂部外面に「×」のヘラ書きがある。21はB区西側谷部の整地土である橙褐色土出土の土師器甕。22～24は竪穴建物SB222出土。22は土師器杯Gで、灰白色の胎土が特徴的である。23は土師器高杯Hの脚部。24は土師器甕の上半部で、倒立させてカマド支脚に転用していた。口縁部が大きく外反し、内面にはハケ目がある。時期が確定できる資料に乏しい

ものの、土師器杯Gの形態から7世紀前半頃の年代が与えられる。(玉田芳英)

瓦類 丸瓦42点(3.51kg)、平瓦300点(25.04kg)、鴟尾の可能性のある破片1点のほか、近世の軒棧瓦3点および鳥衾瓦1点が出土した。平瓦の中には川原寺の創建瓦に見られる凸面布目や斜格子叩き、叩きしめの円弧を描く縄叩き、横縄叩きをもつ平瓦が数点ずつ含まれる。大多数は遺物包含層からの出土であるが、横縄叩き平瓦1点および鴟尾の可能性のある破片1点は、造成SX214の直上整地土からの出土である。甘樫丘東麓遺跡において川原寺所用瓦がしばしば出土することはすでに注意されているところであり、その理由としてこの地が平安時代には弘福寺領内であった可能性が考えられている(『紀要2010』)。(庄田慎矢)

動物遺存体・植物遺存体 SX215の埋土を水洗選別したところ、焼けて白色化した骨片類が45点(2.15g)検出された。その中に、タイ科の歯骨が含まれており、歯骨高が残存長で14.8mmあることから、全長50cm以上の個体と推測できる。また、種は不明であるが、魚類の椎骨や鱗棘の破片も検出された。この他、モモの核が数点出土している。(山崎 健)

その他 SX200の埋土やSB220から炭や焼土が出土した。本調査地の南東に位置する谷斜面部分で検出した焼土層(第75-2次調査)から出土した焼けた壁土状の破片や炭化木材と比較すると、本調査地で出土したものは、細片が多くやや貧弱な印象を受ける。しかし、SX200の埋土から出土した壁土は比較的残りがよく、木質の圧痕がみられる破片もある。この他、SX200やSB222の埋土から鋳滓や羽口片が出土した。(木村理恵)

5 まとめ

尾根中腹の遺構 尾根中腹の緩斜面で7世紀の柱列を2条検出した。遺構周辺は、元の地形を生かして平坦地を造りだしたとみられる。SA210は区画施設と考えられ、それが斜面中腹に営まれていたことが明らかになったのは重要な成果である。SA210の存在は、丘陵上部に何らかの施設が存在することを示唆するものといえる。甘樫丘では今回までの調査地の谷だけではなく、丘陵上部にも遺構が展開する可能性が高まってきた。

尾根裾部の遺構変遷 尾根裾部では、7世紀に造成SX214

が少なくとも2時期造りかえられ、それにとまなう素掘溝SD213、石敷SX182の変遷があきらかになった。7世紀中頃より以前には、尾根裾の地山を垂直に切り土した段状の造成SX214aと素掘溝SD213aという構成であった。これが7世紀中頃には石敷SX182が造られ、尾根側に接する素掘溝SD213b、盛り土による斜面状の造成SX214b、という構成に造り変えられる。SX182は直上整地土層からの出土遺物により、7世紀後半には廃絶していたと判断できる。SX214の周辺は7世紀の谷部の土地利用において北限であったことがうかがえる。

谷部の遺構変遷 谷部東側では竪穴建物SB220・222と、掘立柱の遺構を多数検出した。SB220・222の年代は7世紀前半とみられ、それ以降に3時期ほどの変遷をとまなう掘立柱の遺構が確認され、活発な土地利用の様子があきらかになった。

谷部の西側では、谷SX200の造成の様子と、その途中の平坦地に展開する遺構である硬化面SX202や石敷SX203と、その上面に広がる炭混層SX201を確認した。何らかの工房的機能を持っていた場所である可能性は高いが、関連する遺物の出土がほとんどなく、遺構の全容もあきらかにはなっていないため、具体的な内容については不明である。SX200の検出により、第146・157次調査で検出した石垣SX100が以南には続かないことを確認した。SX200は第75-2次調査で焼土を確認した谷筋とは一致しない様相をみせており、一連のものであるかどうかは現段階では不明である。

調査の成果と課題 以上のように、甘樫丘東麓遺跡では7世紀から8世紀初頭にかけて、尾根から谷部に至るまで、谷の全体で造成をおこない、施設を設けて利用していることがあきらかになった。特にSA210の検出により、甘樫丘東麓遺跡はこれまで調査をおこなってきた谷だけではなく、丘陵上部や他の谷なども含めたより広い範囲で考えねばならないことが明確になった。これは非常に大きな成果である。

いっぽう、谷部下層で検出したSX202の全容および性格は十分に解明できなかつた。SX202を含めた谷SX200の利用状況や、SX200と第75-2次調査で検出した炭層との関連をあきらかにすることは、7世紀前半のこの谷の全容を解明する上で非常に重要な課題であり、今後の調査・研究の進展が俟たれる。(番)

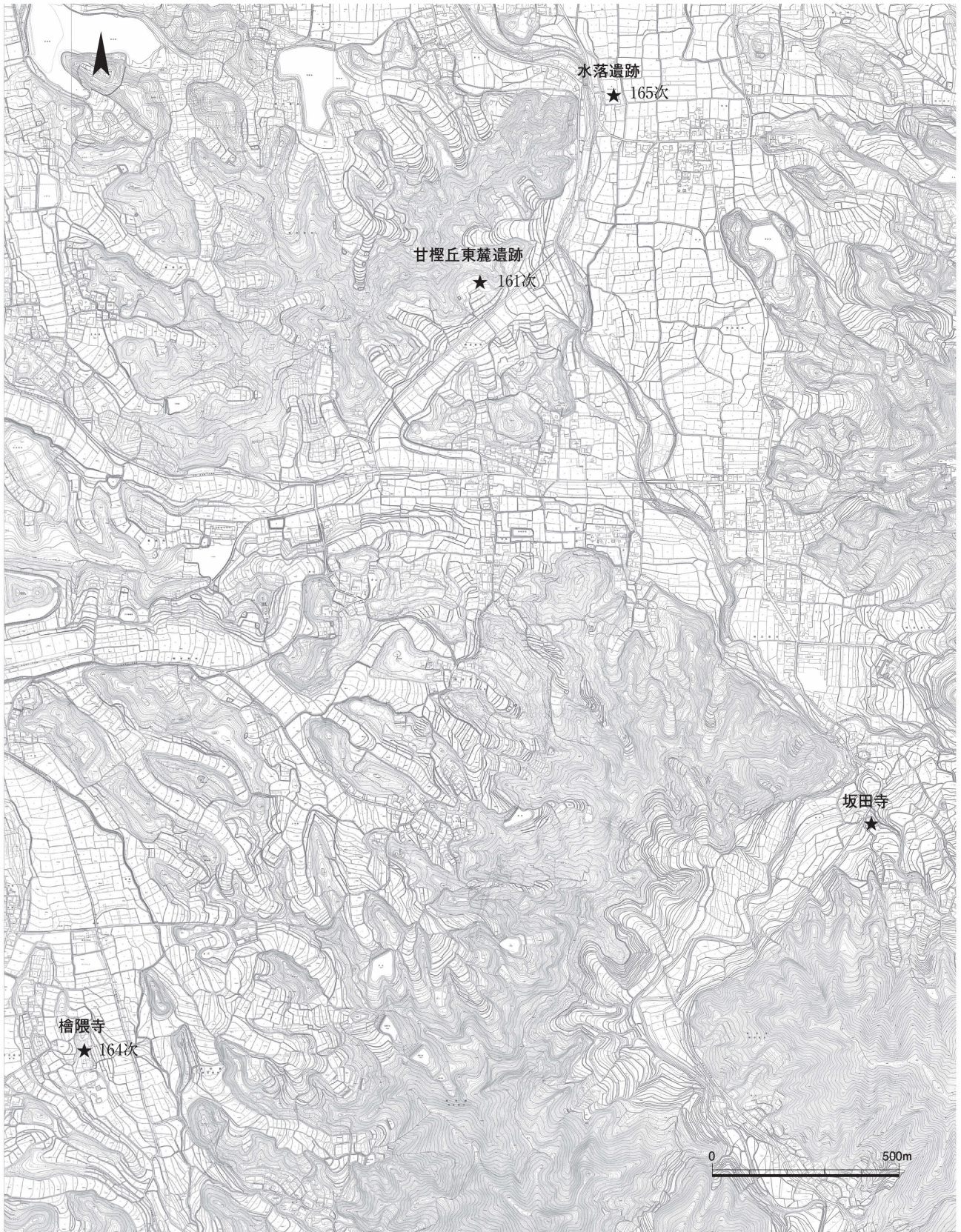


図159 檜隈寺・坂田寺周辺の地形図 1 : 15000